

ビワマス稚魚の琵琶湖への加入状況(2024年度)

大前信輔

1. 目的

ビワマスは重要な漁獲対象魚種であることから 2006 年以降毎年春時点の資源量を推定し、その結果を資源管理に反映してきた。しかし、資源量推定手法であるコホート解析には漁業および遊漁による捕獲量が必須データであることから、資源量の推定がなされるのは翌年になってしまう。近年、遊漁による利用が増加しており、より早期の資源状況の把握が求められている。そこで、早期の資源状況の把握に資するため、ビワマス稚魚の琵琶湖への加入状況の把握を目的として調査を実施した。

2. 方法

調査対象は知内川河口付近の高島市知内地先、安曇川河口付近の高島市南船木地先、和邇川河口付近の大津市小野地先および野洲川河口付近の吉川地先の 4 か所のエリとした。2024 年 4 月から 6 月までの期間に混入した稚魚数をエリの操業日ごとに記録した。また、混入尾数は昨年の結果と比較した。

3. 結果

地点別の混入尾数は 2023 年と同様に南船木地先と吉川地先で多かった。月別の混入尾数は 2023 年と同様に 4 月と 5 月に多かった(図 1)。

2024 年の合計混入尾数は 365 尾で、その内訳は、知内地先で 63 尾、南船木地先で 93 尾、小野地先で 14 尾、吉川地先で 195 尾であった。2024 年の合計混入尾数は、1,012 尾であった 2023 年の約 1/3 であった(図 2)。

表に示すように、両年の前年春時点の推定資源量、滋賀県漁業協同組合連合会(以下、漁連)の採卵事業における回帰親魚からの 10 万粒の採卵に要した日数および回帰親魚の

平均年齢に大きな違いはなかった。このことから、産卵親魚量としては十分であったものの、産卵から琵琶湖への流下に至るまでに何らかの減耗要因があった可能性が考えられた。

2024 年 3 月の漁連によるビワマス稚魚の河川への放流量はおよそ 27 万尾で、2023 年(52 万尾)の約半分にとどまっている。このこともまた、混入尾数の減少の一因となった可能性が考えられた。

今後、データを蓄積し 2023 年級群以降の同資源への加入を評価していく必要がある。

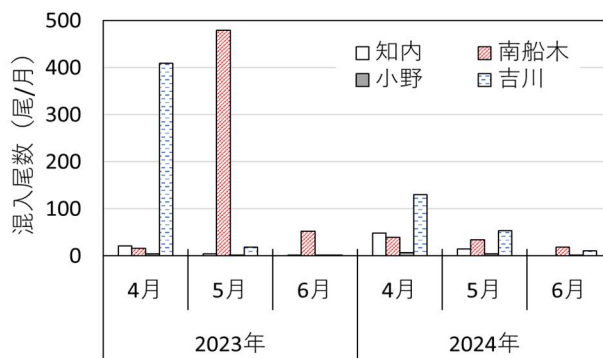


図 1 2023 年と 2024 年の地点別月別ビワマス稚魚の混入尾数

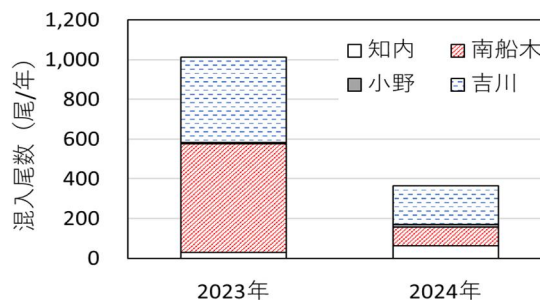


図 2 年別のビワマス稚魚の混入尾数

表 推定資源量、10 万粒の採卵に要した日数および回帰親魚の平均年齢の比較

	2022年	2023年
資源量 (ト)	154	140
10万粒の採卵に要した日数 (日)	0.81	1.04
回帰親魚の平均年齢 (歳)	2.9	2.9

本研究は水産庁からの委託事業「水産資源調査・評価推進委託事業」の一部として実施した。